

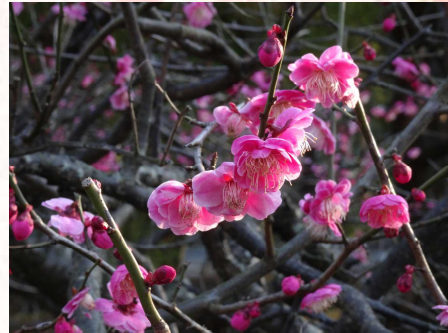
恵林寺便り

平成 27 年
第 44 号

2 月 15 日

煙霞不遮梅香

えん か ばいこう さえぎ
煙霞梅香を遮らず



二月も半ばとなりました。二月十五日は『涅槃会』、お釈迦様
入滅（にゆうめつ:お亡くなりになる）の日、命日です。

『涅槃会』は、『花祭り』として知られる四月八日の『降誕会
（灌仏会）』、十二月八日の『成道会』と並ぶ『三仏会』の一
つとして、仏教においては、最も大切なご法事の一つです。

お釈迦様の命日が、ほんとうにこの日なのか...それは実は、今
となっては誰にもわかりません。しかし、二千年以上の昔にさかの
ぼる感謝と敬慕の思いが、今日もなお、行事として伝統の中に
脈々と残されている...これはほんとうに素晴らしいことです。

さて、今回の禅語です。

えん か ばいこう さえぎ
煙霞梅香を遮らず

「煙霞」というのは、「春霞」のことです。

二月も後半に入ると、暦で言えば二十四節気の「雨水」...

「霞始 融」といわれるように、雪が溶けて水になり、凍てついた
大地が緩んでみずみずしさを取り戻し、春を告げる霞がたなびく
頃となります。

春霞があたり一面に漂い、見渡すかぎり乳の中のように真っ白
となる...梅の木もすっぽりと霞に覆われ、姿が見えなくなってしまう...
それでも梅の香は、遮られることなく馥郁と香ってきます...

人が見ていようとみてまいと、梅は時が来れば咲き、見事な香
りを漂わせます。

何事にも時節因縁があります。しかるべき時と処、そして人を得

なければ些細なことですら、思うようにはなりません。どれほど努力しようとも、なかなか結果となつてかえってきてはくれません。しかし、真っ直ぐにやるべきことを一途にやっていたら、必ずその時が来る...そして、ひとたびその時が来たれば、もはや妨げるものはありません。寒い冬の厳しさを乗り越えて豊かな香りをふりまく梅の香を遮ることは、なにものにもできないのです。たとえ姿を覆い隠そうとも、その香りは必ず私たちのところまでやってきて、咲き誇る花の在処を伝えてくれるのです。

教えを書き残すことのなかった釈尊その人の肉声に、最も近いかたちで伝えられているとされるお経の一つ『法句経』の中に、このような言葉が残されています。

華の香は風にさからいては行かず

よき人の香は風にさからいつつも行く(『法句経』五四)

「よき人の香」...素晴らしい人の振る舞いは、華の香りのように周りの人たちに働きます。ちょっとした思いやり、ちょっとした心遣いは、美しい花のように私たちの心を和ませてくれる...

ことさらに働きかけようとしなくとも、声高に呼ばわることがなくとも、自ずから、有縁無縁を問わず、触れ合う人の心に、暖かい灯火をともします。

自然の中に咲く花の香りは、逆風の中では伝わりにくくなってしまいます。しかし、よき人の振る舞いから咲きいでる華の香りは、逆風の中であっても、確実にあたり一面に拡がり、世界を清らかな思いで満たします。それは、私たちが、お互いに思いやり、感じ合う心を持つからにほかなりません。華を華たらしめるものは、私たちの共感の心なのです。

香は禅心よりして火を用ゐることなし 花
は合掌に開けて春に因らず(『和漢朗詠集』)菅原道真

